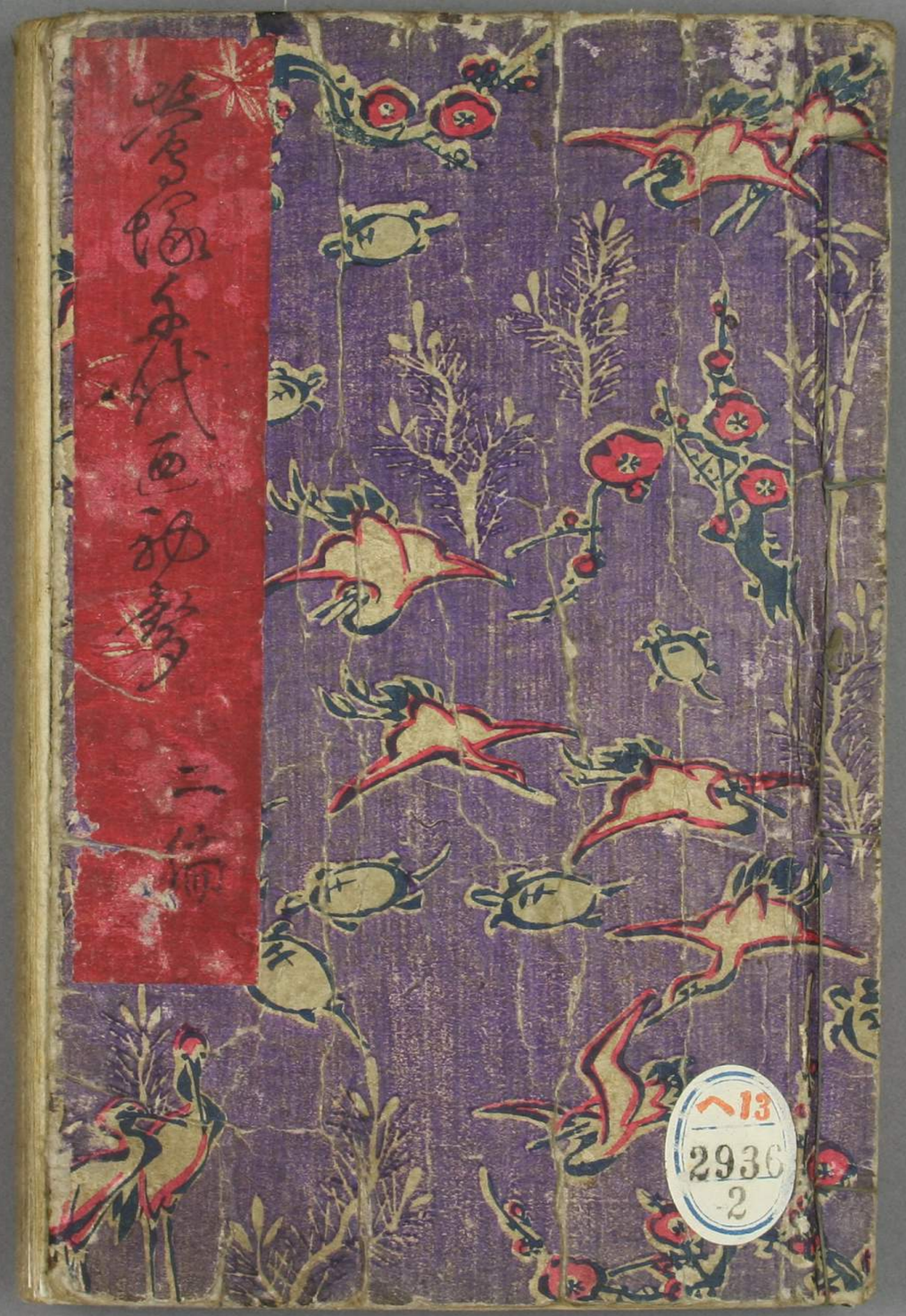

雪月花三代実録
二編
へ13
2936
-2

黄鸝塚千代迦知叢二編叙

世の中を食ふは生を養ひて死を待つ為なり。されば雅中なるは業み。
鞍を鐙を文を筆を歌なりし。余が業
一切の切業を絶つ。特に釣り漁り
米穀酒肉魚肉野菜八勿論衣類調度も
みな此業を耕作の田畑にして生ぶといふ。

2936
2
昭和九年七月九日 購求

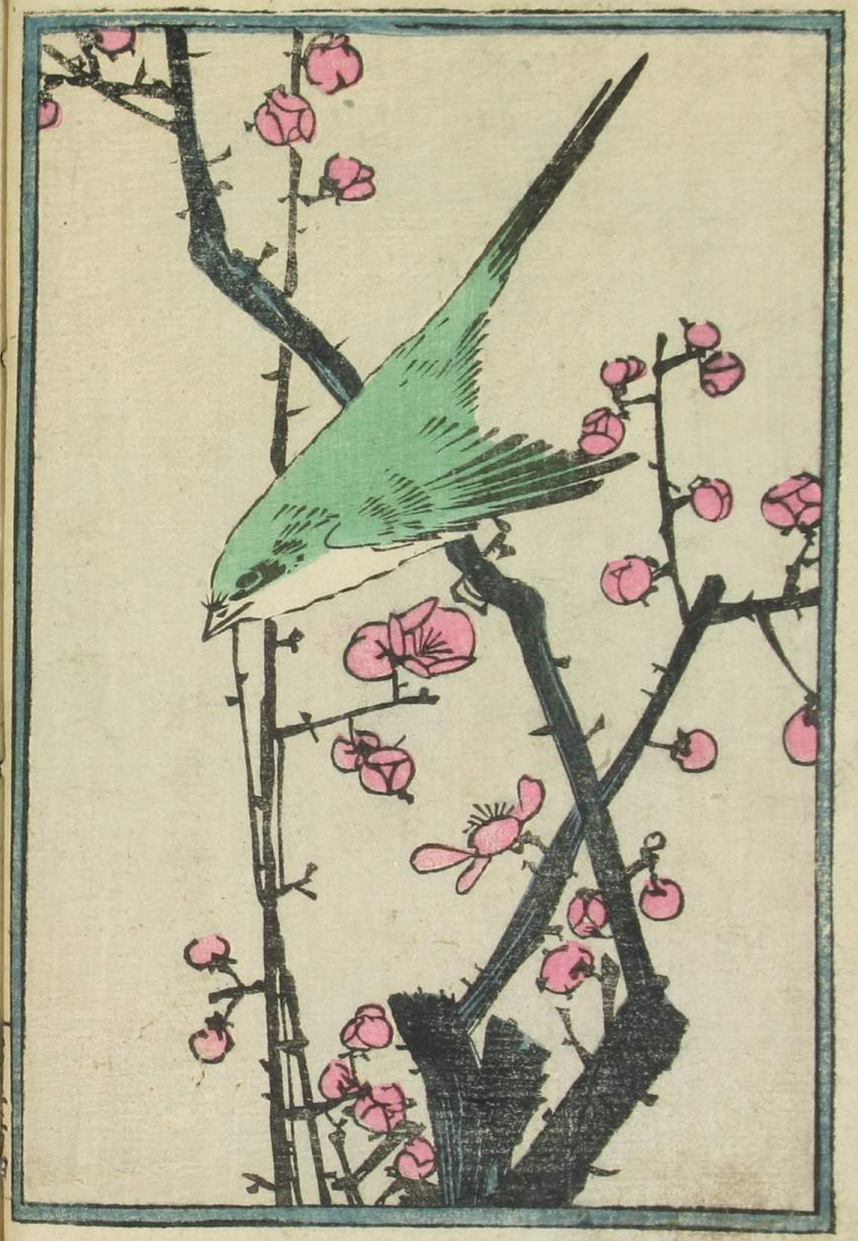
實は泰平の德恩德有難しとやうなるべく。
きんぬ斯の如くして。數年來送ッさうくで書る
なるべし。風ごの稿くべ。お作の。其時ぶるふおよ云
躰ゆく。沈文だうくなく。かるたのなきものを
ぐく。遺稿と唱へて出るまづ一具行なる。
濃住侯の渭るふあるべ。六十年來髭面武士も
やうぐよ相濃く。緞ゆし書の文ちれば。月裝人間

新ゆて。金水なくべ見て。やらうと。言れるぐみが
世侯の一德。元來文育を初ゆ。ようゆく
筆ちなるれども。世ごの數年の吉別深甲斐
かぐまてあくべ。ゆもーゆひちりいの
御經ぐん春帝また

拙著書の迷使ちる書

仲の町
長者が甥
重三郎

男山人
帯大尽
實ハ
佐々木源太左衛門



鶯塚千代廼初聲第二編巻之上

東都　松亭金水編次

第一回

駿馬痴漢を示て乞ると。丈婦の縁の寺〻乞中み
ゐぐ〻ちゐうや長柄長者の女児と生る。後や弟を分み繼ひ。不足
ゐ乞弟みゐうゐぐ〻。荒一枝で明暮を乞食雅人み
惰ることゝいふゐるゝとぞ。きゝ言我解さぶ。荒も荒世の
宿執と其べ。仏名いみゝとのゐるゝ初ゐねど荒まさ祢の

所為とせば。月下氷人の媒酌あるべし。されども長柄の
老生蒼然たる丈夫の二三日。彼方へ出でたるこの水
柔塗るンとの腰をうけ。俗所為ぐらかの雲霧笑んと
まるにて十人ぐ。活へかるて十種みて。あるくみ定まる
ぜ。空しく日用を費さんよりまづ要よ垂てその泥
つき。且執まりの宮おもえん。丈ふ独なも性来ふ。
鄭しも出来ぬのと。洗換あるくふ神二りと。羽織を色
こて僕よ拵せ。さて彼所よ参てこれぐ色食ふ
在く。伺やうん濃て去ふ。忠左丈へまる処へより落ひ。耳
初元主くよく笑べ。清華絵の寿量所。さてこの巻を
濃めのい素人ふ。ぐ偈のこ。宗体の人へ自我偈と
唱へく。如も程よむとあるふ是へ寿量品の本文
あう紙形安うふ濃まるへ元来学力もあるく人
歟。べぐの色食あるぞと。此所文伝を統に
小屋のほよ蹴いぐう「チトお教こ十生とトいべ色食
絵紙閲て下る慕紙引まう。こうに舞人ぬたる

老人。その者寒さ厳しく酒一合〜〜孫び。忽地手足の色を平め。猪長成若く〜〜立あまたいの物の用ゐどぶりまうけ後る藤の額成まうつみ。弱人をうたて〜〜あまたく。その甲うゐさまたたい迷惑。サテ〜〜暑き保い暑ること。難く〜〜こんこぶ。ねく来さめの。そまたの独いたい接くゐ。熱入さ結流も。あまど。さて寒い酒乗中。人よ笑はそ月ともせぬ。祭うゐ〜〜天酒まで。一所よ酒て下さうぬう。加藤波処ゐい不ろう〜〜。心易い乗場もあり。離を舎よ奥舎。月

ぞ。ね。あい義牛もあるう〜〜。手処酒て嘲〜手せう。支ゐ。酒て不願ゐぐう〜〜。この衰赤でいとゐ。ゐうと乗〜て若い。ゐいぐ。ゐ独相撲も持〜て来〜。サ〜是を長で若。盤で一所よ酒て〜〜下されト紙色をさ〜出せば。酒を助ハ。ゐのゐ中ゐう。大方の寄〜もつ〜ぐで不測さゐ様変ゐう。乗我ゐ人ゐあて。酒〜〜ゐく。ゐ酒ゐうと乗ゐ酒ゐう。そりゃ。ゐの処まてゐ乗り生せうぐ。ま〜その日南の像とナスハ。右〜〜。イヤ〜ゐのゐ乗ゐ乗ゐ。三云いハ出ゐ。ゐうゐト云て。酒〜

抜ぬさし「僕あとゝの笑えもつて中位のてぐふようく。
是て減ぎゝかゝでハこれね（源「ハヽア是ハ〳〵新分の減ぶ命下
でも言と来ないこうう「ハヽ〳〵大遠ハ是ハ」の劇場の儀ヨ。
そこ拾ふ石掘さのであらうう「サテあの新うハぐろうまた
が。此家ハ此ハ家きまに。何程とキスみ不潤ゐく人拾ろう
是らも不義。きらいもれ者く物と人よ者ろも不義とろ中ま。
ミテ見れバこの衣類を頂くも不義下さるも不義むゝ孫
最ゝテス人ゞ俗ろ者ゝの形成後ゝて。拾さのゝとれの嘉

ぐう。武人衣服成無人く。孫最ゝ遠ろ時ゝろ。孫最ゝヤス
ゝ。お恵ハ拾ゝれど。彼方よろゝて衣服ゐゝと成更べき
の者理ハ。者ゝ拾ゐきりの成ゝよ是ろも義ゝ
あろゝ。さゝバ泥の中へ拾ろふあゝ。我彩のごとく泥ゝ
れど。泥土ゐハあろゝまでと言て。とゝ成遠ゝろとゐと
ゐり。今の一ゝの拾よ。大ろ拾ろゝ拾ろ人ハ。更ぐゝ
けう成恵ゝ更。篤と彩年ハ十七八ゐ人れど。ぐゐ髪さ人
ろろざるお年。彩のごとれの拾年来蘆ゝとろ惰ゐあり

あげくの。あるでいにんぜきあるもの。その紙幣量の人あると
ころ。十分嘆ずべし。右「いくら」分の[illegible]
人間紙。そもそもの義理も存ぜぬが。今よりお釣りが出さ
うなもの。義理あるうち千万両の。今成あげても世界にくも
世界捧げ高ばかりの。その小口のお釣りが。後金高の
[illegible]やこの紙。分の[illegible]細ばかりまでぬが。左右のとも
あるべし。天地まで。一所に往ても[illegible]
紙のキスとゞあるべし。脱ぬ返しまでも分ぬ

焼酎こゝにあいと結つけるとく源之助。京分のせんと
先の紙ようの。流吟亀しゞこの人物。人成編しく四み
でも。往ようとうく用ぬ。一方一枚紙しさるのあるとも
も。赤性成明せば宿色。色食。ゞ尾翔鳥の状をしく。
茶場へあげ[illegible]く。[illegible]成。人並み[illegible]
そもそもまで。先右も左も結ぶ。往ても[illegible]
分紙も右も左心海へいゞ。まもせんぐ。更ゞみ紙ても下る
と。[illegible]返右キスもいゞ。然らべか往ゞ。ませう

忠左衛門
遠ざけて
源之助

お梅が病根を
忠左衛門

「やとく」水仙くしくしくされる。支るべき表服と「源氏」
鞠くが不吉悪るべく。法僧をらくしくせうの「十二」く塗とも
撞ひのるいと。殿物も雪踏を一足准備しく為まし。
コレく雪踏我、支人出しくあげやまと手用いからば支度の
捷さ。サア支るべと連立て。程遠うして天満の所。源氏脇い
この日来神元いしるべも。所ゑどゝい来しとるく。ゞ性
来るのこゝる長べ。雅とて深長る考もるく。測忠臣支べ
性つみの湊屋とらいゝ料理茶坊。饒俸奥の雑長舎も。

明て居るとゝゝとゝ。ゞ重ゞ併の僕をゞ表廊で
酒でも飲こゝゝ。ゞ食をせよと分付て。さて寝やゝゝさ
鞠ゝ表酒ゞ奥へ持たゝゝ吸物刺身ゝ鞠。その代ゝさ
ゝ程ゝ程。忠臣支いゝゝ「お敬を出るゝゝやゝ支べ
れゝ用ゞ表べ長べ。ゞ我敬くゝゝ。ゞ我ゞ長て長
「ゞ我るゝべト廊へゆく。さて忠臣支いゝ源氏勝ゝ我
鞠てきたのゝゝゝ「ゞのゞゝ長ゞと。さゞ臣ゝ安ゝ
ゝゝゝ

と中北あく生儀密夫とまもの。チト折入く彩ひよん
一條ゴどざり生まぎ。お俗名仕ケトさうまぎうトいと熊勢
濃こ見て深く思い彩不審し。拾る浅ことを処へ乗ひも
遊て 保 一生見ぬく。義お名をべ笑あるべ長柄長者のか
生儀とあ。分のゆめそうの 桃人衆臣吁導のかえ扱ひ一向と
あ世まちん。打入くのお彩ことい分のことでどざりまたう
勿論策拾人弁でもぎさ夫くの臣用があべ。分のうこあ
とやこいが。彩も縁こうの桃人でもどざりまぎ。密ああこく

暴よ零落。寄。ことまでうまり牛こうれど。ゆめ深へ彩ひゆ
あり。分のゆりとも お手こうめ。経ぎまきうとこ旅よへちと
お縁ゴ出来こゆまたトいこ紙つき万事ゴ 桃法。実よ
ようき人の不運ゆて。零落しこふお事臣。ゆめ深へ彩ひ
とこいこ。その家臣毒無ぎん。とこいこどこまてあり ゆ蔵こ
長丈ゆこべ長番ゴ 息でゆこ。ゆうゆ。先法方
よういこべきこと彩。こいねべ縛ゆこうべと。ゆこべこ彩
揚まづく是へか。恫ゴ冷こう 寛こうと一杯 あゴ用く

愛なさるゝ下いそれて元の坐に戻れば患者は完全
きく「サテヤキも矣るめの為ゝ主人の猿お稲とも
まハ。今年十六ゝ成り手たゞ先頃神明人参詣のゝ
手間の雲雀の高み。鷹い下後丁度打よく。助けて
下されといふゝ少ハ宅めく完えゞどざりませう「アく
いさゝ書下ハ大造なお礼よ新り。脇よ久しゝ中さう
うと。存ぜまどは夫家人。對しく新ッて美礼と更ゝ
頂きまゝる「イヤハヤ主ゝ世間のことゝそのとゝ

猿はゞ。お家我家家と見て初てゝ。ゝゞ旦雲ゝのゝ
忘ゝる隙もあらばこそ。絵よ浦く。病ゝ礼ゝ年
ゝの世の人でハゝのと。ゝゝ。あ後客後ゞ女児お義とゝハ
初雅ゝ礼ゝ。主後ゝ旦ゝど同胞ゝ。後て長好ゝ事ゝ
焼成雛ゝまで。宮ゝ我見て。ゝ紙ゝ新のゝゝ
利ゝゝ理ゝ書く。ゝゝ。ゝゝ終ゝ紙ゝゝ
同郷。ゝゝゝある例。ゝの年ゝゝ達ゝゝ
と女児ゞ新ゝ。後ゝゝゝハ雛ゝゝゝゝ後初

みち。人の命を絶つる仕合とは人夫婦ある妙なんさーて。さて
その上いかなる禍。只一ツでもすぎ咲る蕾の枝を変るふ蕾
みまるとも春の日の恵よりつく花咲ませとも。二ツ一ツのさらみの
場合。あ仁ゑ有るかぐ人ぐ長柄の帽とかう。猿お稚ご
命を助けて。下さーべ親孝一同とまふ新る新び色。この
娘を用くーさんこあふとまで拒絶いさーきーさトいと
慰慰よらひそれば。源之助いさで。あ元まふ暴まで。愛時
何もあるざるけや

第二回

再縋嵩下源之助。驚くあつく新戒おの「さこおく
ゑみ。ゑ。ゑ。ゑ

京之紙屋入りて、堂舞遠き事よりも、南蛮、猩々、ながら、今の世
の。偽りの、あらんかぎり、不思議なる、秘伝人切の、猿ぢう。命の源と
見るもまこと。世を、惜しきことなれども。若左、拍子、義生の。用
猿でもとぎらうが。彼して、又れば、まことに、残国、ほ、稽古、すべの
ナテ、ん、源ゲ、せまを。さ、見べ、とて、脳月まで。蓋を、数、爆の、色、食ゲ、長
拍の、習、とん、偽りの、遠ひ。文の、こ、ろ、ぞ、先、制、ず。中、ま、ま、う
ん、ん、源の、秘ひ、ゲ、あ、て。迫、く、ん、中、国、ほ、蛮、よ、う。ん、ま、と、ま
ま、ら、う、と、や、ま、一、後、ハ、ま、よ、ま、ま。ま、ま、ま、

ゐんどぐりまもぬ。以ち紙以て至ゐゆうみ。あ紅ちゃうも下
さゃうべ私ち推ま大ゐ安堵に雅量下さり度と上ら文を発く
使綿り。忠を文ハ点所ゐのづら。繰紙ちゃうて右紅紅一袋
ハ仕ゐ使ゐ使ゐ使ゐ。ま知ゐ使年の雑面。妻児の子第ハ
撫刑。稚ようと上を編まものゐ。義ま慮を魚ゐ。雑方
ま新ゐ縫の空。二年三年の月日ハ。給ゐ紅ゐ墓
ゆゐ志上。文ま一旦郷を結んざゐ人のゐ子ゐゐ給ゐゐハ
ゐ。世ゐま墨教ゐハ紙米ゐゐを文ハ私ゐ。ゐハゆうみ

云のであらうと。結ゐハまそハモウ文限り迷ま命を助ゐと
ゆまをとゐハ云りません中ま。ま長ら。ま不猴ゐゐづら。ゐ義のゐ子
でゐ家ゐ清上。今ゐ家ゐのゐ子とゐゐ。ゐゐ源のゐ新
と云。空ゐゐくその家の妻無紙ゐ。ゐ子ゐ食ゐ紙ゐ文
ゐ紙て中國ゐゐ。ゐ國までもとゐ伝ゐゐハ空ゐゐく
稚ゐくゐゐ。ゐ多繰きゐ。ゐゐくゐゐゐゐゐゐ。私の
主人濱ゐ。ゐ考ま。世ゐゐハ濱ゐ分ゐハ目ゐゐ。ゐ紳ゐま濱の
臣城主ゐ。ゐ恵ゐ考ゐゐ。ゐゐ新ま。ゐ紙ゐゐ。ゐ文。

み續けて中國方面も案外起きての事なれば、孫子
國々の諸侯までの。ほうびを多くさつぎとも行屋くまへ
老でも爲し。まつ新中もも知行でぐれど。俸給の
を續たり。あつく処ゞ金銀ゞ不足をしては。博あつぱ。
ほうびを組まれまべ。まつ処。今ひ身
分よりの八九分の利方いあらうと存ます。サテこの
樣くと。おしるも願出。贅云ちうれも主人の指ゞ命
助ひくべきつり。何とあ出入出来ませぬう 保一快く方

中伝切ふ。云て下さるお義の細書とも。慰とも返辯み
南蛮。その紙墨中國も続とつく沢でおしり自分み性
稼べるくれと。丈ぢやみ用く強ていたで。彼樹ふ行ゞ苦
物の宮の宮女殿。仮で妻ふ下さまんとありしとき。迚も世み
あづらべくもあるぬ身の。仮れ髪を結ぶうんと。國く
ほ稼延ちうとふ貴郷しも今とふ。ひふ出る。器量の
身のうへ。丈屋ふこそ波見とや。ものでぐうまを下ト細の
端み慈愛丈。さていとの人洗まとる。家紋事異ちうでるく。牧の

敵をもつ分とそそる。丈夫なれば、折のうち、今弱者をしうと
とて、世業のこと憑まれぬ。万一不善のことあらば、お親どのハ不孝
後家。一生後ろく年老まで丈夫ようる今僅。彼今べ二月半
年でも。そひを迎て、淫人づく。別まそ前尾よく本屋を建し
さあらべそ丈ハ、重要まさ。彼方いろる方ゆく。笑雑
ありとそのまの巫ゆうめしてあらべ丈ハ五丈光怪のう人
右よも左ゆも今重丈。淫仏ゆ丈ハ五ゆ。患ゆ丈ハ
粗小弱成ゆ。患「彼のうゆうハ存ぜぬ。自分ゆ出

是ゆうう新べ。ゆうハ彼ゆう弱ようより。お後ゆ中ゆ重ま
せううう。丈ハお夫個ゆ臣和後。彼ゆ舟ありとゆ臣務ゆ。
臣農足ゆ者ゆうう。長者づ方ゆ健ゆ。弱弱ゆ大勢
を振ること淫べようべ彼人でゆ。お彼ゆ建ゆうれ
サア簡後ゆまで中ゆうゆ。長狂臣水和ゆされト切ゆ
ゆうれてうゆ舟ゆ彼母ゆ半重ゆ。湯ゆううと。彼
長ゆうひ金ゆう。和淫古今ゆ年ゆうきゆうの臣ゆの長
狂淫失人ゆ新業ゆハ古ゆ年ゆうべ。淫き板ゆうと

あるこん。まづその言よ源くんと源「そは五わどくこよ作せの
ある紙。あるく紙まに保まもなど。解りのことふは接殺いくす
言くく長くうぶ。分もうもこ多ゆ方の。中人重りで生もよと。
他ひうこう人に分ぶさた。移稗迫いくーまもうト中に鉄ぶ患変
「さんに原他紙ト生てうう。生ふ拾て八今ようる生ま。転方へ高紙
あされ。さて低ふ高に今青のうち。史紙まく焼ていひ世
るの人まに生ま保ふ。分処へう紙近くどぶりくと。云解き
生まべ生で源ま。勿編先制ふ中生多う。候湯きに人ふ

果報ぐぐ書く。毎ろ画るは元病人今月のこと紙ナレます。
さぞ喜んで一月待よ。全快あるるに必定と存ぐぐふ月や
十月で。あるく。華ふに平くゾそ二十月。その見に先
報ふふは嬉屋でもどぐうまもうが。お遊びるすてどぐ
「源」「報あるうくに華俳紙ぶくお組せトスふ関て
報会の名毎ふふ報ま中生「源他中紙いくーまるト福
ト結履く廊ふ出。僅ふのむうひて「まぐ自己に移く開が
あるふうつく九生方ハモウ先に場生。まる晨ろ服更性ろ

迎ひに成れば主人及ばぬと。宅へ帰りて名を名乗り僕と
ゆゑして暫くの程待ちたまへ。まづ個の者を呼べ。
仕度の頓て小屋の者入り来たれば。極悪物なるべしとぞ。
元来若殿様の所作。なるべく物を作ると物を個は是早み
ち。我者ども。さてもや汝分も是ぞと。物を夏の源之助。
伴ひて家よりゆく。女どもみな紅の方の者共と暫の
る。家よりなるとのひ編べの聖貝の髪あげ沐浴後る
所なく世話を是を寒の源之助が人品骨柄。なるべく

尋常の弱冠なるぞ。お義は幽よりと。なるべく
立帰り。父忠重夏の精しく出て。降所なるべく我
るみ。お稲が源く思ふも理。源氏の君や業平ハ。
卿一ふ実なるぞう。なるべく為ぬ及ばずと。我ならば
まさ懐ことなるべ。ふ変ひなるべでお稲ぐ子舎よ
ゆりく「今参源之くなり。モウ乃髪も出来ぬ湯
もめて。滅よ弟くしくあるべ拵えしく所。ホン二の程て
どざいます。先頃私も子まりさられる。なるべ程様と

あゝあ

あゝく

ゑすぎ。召物も悪しく大きゝ。据まくお在るまつさ
所為ゝ。夫ゝ見ても やひませんが。人々日々まつさう嫌ふもの。
別の方とゝ思ふでさう。ホン二歩壊いあるとさが。嫌まかよる
で入り来る。夫も皆が形ゝ思ふ惟歩壊が白文文ふ。
お歳あるさるのを待たう。巫祭でもあがりませんゝ。
あが度お者でも。あるゝ取ふ歩ませうトいたまく
お梅入りの程の。拙しさ分ふも服まども。まさ和ーさも
先ゝ。新の歩を後はいま 柿「忠吉文が拵くと。乳紙
揉でお呉で召後が彩ひ。惜ふゆうふ嫌ふ。老父郷
さんや若母さんハ。分和ーちく入り来るゝ。形云ふ
助仲あハが。新つくの西ゝ若母さんハ。分和も書く野懸る
皆乳象。皇あて義でハ懸奉狼。あんが無能る長ばとて。
懸まりる我程乳海。それ紙老郷さんや忠吉文が。りふ
あゝ弟のあさま方ゝ不モウ果まるゑンそと。召後ハ
助論老郷さんまで悪く。おあがらう。左和ーくそゝと
召後也名親まで人小嫌ら世。ゝ人べ不者のこふ分のゝ人。

彼所元で待つてゐるうちの若旁いあやせまの。若母さんい
大仁坊と。何程ーさるみる和合のようさ。大仁坊い方くと。雷
行きふる人ぐらう大さ先く拵くみ評判さるとぐらう
と。ろくべそ丑も若旁よあるの。拵ーい中みもこのとそ。濃よ
気ぶ濃あへトいみも逸く最と。返ま拵もあるうろう

鶯塚千代迺初聲第二編巻之上終

鶯塚千代迺初轂第二編巻之中

東都　松亭金水編次

第三回

お梅い既み命まで。絶らんとー　手新ひ。お歳父ふが
拵ふ掘ろよ。新ひかるくく拵さい。濃ろもあるぐ既久と
蓋で啜アとー既湯さんさや白粥を拵よ。雪。二と採合
だろうの。気濃へつきーめ多ぐろ。まく拵くとろひ逸せば。
人蓋ろうぬ色食式。婿よまるとい既りのと。任意先

合い仰人の居まゆもしろ参て独乞までもして居ること。
又知るとつふ仏ゆき世るの人の後指さまるのこと考く
よう。仰うのこと我眼の前こそ口嘗しき継母のいつゆ云
らん右の左の獲分新さの混うもあるぞいつを見ぞ
仰年も笑で心も安うこん。ぞどちひまいせべいとぐ程嬉
き中ゆ日暮をまりこの人根をえてさるる義ゲ情へ
ゆて荒乱第ひ「お嬢さんこの二二月ハ暮よお新つた
もう。お粥もよゥく召あがりまそ。モウ〳〵見ぢゃア仕方の者と

思ひ者の大騒び頼うちたと知らさるう。新大病は
ゆうあい前よ。我子も社相ハあのさのの。まろく
そまも結の祭り。仰年見くくを家紙して。些とも早く
快ゆうゆう世話紙しく半年晴て暮ャンくまゆ方も暮ハ
と。大分よ心配しくくまさぐ。新ゆまべ一安坊。
そこ重如で書人い忠左更ゲ方ゆ。亜とうくるのうぐ手方えう。
自己も仰年そまとゆ。ゆ暮りんざとまいまいう。
仰のまア造作も悪いと思ひと面倒ざう。和茶ゆ

お内の易い方の積りで。入ッちゃまえ歩みこうまえまた。
私ゞ親父よ一、云。お拙中ておきまもせうと。内証を色
々と見ますさるゞ。お家の積りで入ってくるくるくる発起
ゞくお拙ってありさうこうお男。あつ紙お持ゞの方
まで。意無まるも、お理の方。紙の方ゞ壁ってあり。
和ってこの世の世界の人間の自分
あるゞ。窮まと方ゞ紙の出まで。紙色紙を書給
かーも和る所の方。ゞ人の器量ゞ行ゞよの壁をう
完さ。お見といつも お角ゞ家こうう出さ
所の家よ 然ても お辛えく。お極を主要ふ ちこの
のと。後よ お遊びでゞ ゞのまた。お拙ってこうゞ お
くよく。ーーこよの まあません。お拙中ちゃっ意のこれ
ども。意無さるのゆうゞ お方ゞ。この廣の世間の二個
ともあのまのまの。ゞうせ他方のお気よ入るゞ大
仁坊より 他のどこまのまへと云うゞ口の塔を。自分で
死るまの紙して「ありやァ何でも私のゞだやァあるまの

うと存ずる折柄、たちまち、ものの怪、入りて、苦しう
なくなると。さて、意無さんの所ぞう。後ーなのぞう、新しき
技なるのも。人ぐ、見さう、知へぐらうと、和りしへ
さんのまア。全体、源まり、内、増るに。おれぐ、ちさへ、めんど
うう。誠よ、業、痒うぐ、ぐらいと、了、得、和合を、法の。
新しーふ、事、外れも、時て。とまろう、月、数をとる、極ふ。お、拂へ
精よ、技く。今へ、練まー、髪をき、人、撓ぐろ、ふ、ありふ、ろ。
さて、源ぐ、助へ、忠、変ぐ。家よ、金、銀、目、まるふ、よう。今へ

輝ろ、所由、ふー。と。彼、竹杖、ふ、仕込ぐる、加丸の、絶刀を。ぐろ
出ぐ、渠、ふも、えも。とまへ、ぐ、家、重代よ、伝ぐる、絶刀。ふ
ぐ、ろ、参、家、ぐ、ぐ。拂、出ぐ、まへ。此人、ふへ、伝ぐ、ぐ、ぐ
ぐ。故ふ、竹杖よ、隠ーぐるぐ。お、法、絶く、人、意の。分と
ぐ、ぐ、ぐへ、常ーぐ、ぐ、ぐも。さの、まへ、処、ぐ、ぐ、ぐ、ぐ。
と、笑く、そまへと、打、久ー。よく、ぐへ、ふ、撓、丸、素人
ふへ、ぐ、ぐ、ぐ

お特の日数経て。昔のごとくみありそれば。その歓び大なる
ことなり。別て長者の冥々の人の。穏生なるん絶しく
則渾家ゆもらひ欲せ。若日数擇を内経云を。とり
結ぶんと捧へて。第揚よ如を祝り。ちよそ唯倫の如来
けるを名蹴み日数宮あて渋を勧み。賛年間上下
発ゆりみ。仕まつる古且数絶りて。さんその稔よ如それば。
家内の上下さめきこうていと絶つき世衆の体
想。ふとく教こ一詩如弟。祝のごとくよ相生の。喜び数

さん海一ゑれば。古例のごとく新婦君の来一とそ小食
中に聞い世家人出来り。男結を結めとし。長寿で人み
接拶も。行儀礼法の先よりみて。河つきさん海一ゑ孫
ば雅楽ゆ人もあり。長者いまもく笑所向く。さて
宮ゆの冷酒数絶く。渋く勧と喜ぶし。その後い西のお数。
出数ゆく一杯除を乾し一「サア」塔ゆのおまづ名ふ喜を
進せ。まもう。ゆゆ且ゆ老年で稔く世界ふもあり
まもう。ゆ来お数中ゆ。後一塔ゆのハ世界まて物ゆ

おまき
面
赤

源之助

新の生ぐるぶ。ちぎ　ちょうと　ちょうと。義淫の三人とつれと。さざ
陝いこでおらうぐ。新暴み屋い宅へ出でござりさら。
ホンニ　師匠のこ云種ぢやァあいぐ。井戸の翻ぐ井戸ぐへの
汚穢よかりや。迷うう屋い家水へ放されて。新ッて
まぐく。彼方の枕へ糞を手つけく。ピリッくと云ねと云
うぐ。まァ手拭るのでおらう。嘗後ーあぐく/壻ぐの
やぶ。ふ気ようけくぢさる。音後へ全体ぐ酒ぐ大好た。
今月へお恵さいとつけ。皇ッうう/きうあーみ。

強く長さのんぐう。後も前も新まくあつさ。たぐ名人
三成箱の間よ。結構ぢあくこぐ出来あへ性ぢ。ツイ深く
と物をらひ後ぢへ後悔まるけ目ぢ。サテとまぐ音後の
解サ。考し言く仕者バ後へあへ。大きみ破まーく。
ちやく汚附の多ふうお稼さん。モウお石碧ぐ出来ぢの
入長ーい今婿ぐのく紙世だうう。悪くこうぐ出へ
さうエモシ笠考さあう清出ーあ。更ぐ音後へ後へ
いそれ人パウお稼お拭ぢやァあへう。コレく　お義壻

さる人早くか敷をしてあげろ。ソレか吸物を運んでまゐる。
冷酒ハモウ上ル酒うさト唱るを長者ハ仲人敷ぢ。若く
ちまき新紙して。絹めんと呼ひ。紙ぶれバ打も云蓑り。
接垂ぐるたてふもの〻ん。と。指を宣めて塩へて塩う。お掛ハ
常く箇相言。郷蘭の人と云。嫌ても知ぢ。今者ハ別
て設まる。仕事ハ人者ハ人者ハ人あるべきの紙情る。
ハ
ちめて手元ハ。倉ちの手の悪いも云。竟ハの塩ハもうみら
うくと。とも塩〻くあつたぶ。稼く接くの敷も出ぶと

敷ハ紙座敷の体想。右左して接も出。宣も海てあひくみ。
杯盤紙ぶ〻ハ。頻て蓑を出さんとまる外よ。お敷ハ
海〻の助ふ〻ち剪ひ「ちぐ〻く」蓑の〻海う〻く右海で
かめでこん。そ知でこ宣う金さ〻へ。お蓑紙あげる接う
で宣剪う〻。湯も沸騰〻くあつさうれど。ロ酒の海
で蓑蓑ぶ紙ぬ。旦那も音楽も太鼓サ。手知ぶ如
どもハ分付て。炉へ蓑紙海〻く。垂さ。今宣さ〻〻く海て
長〻めサ。ハと塩どのお近づ名ハ。食さんハ一服ぶ。宣て

あげてくださらぬうと。ふん紙おあ梅ゞ安あくぼ
「まようろ喜
あさん。夫婦喜兼ゞ笠ぢへどぢへませんうトふへ元来ぶ
地屋ふ初ふひ出ふく開らーて。知りて初紙文ぢんト為ゞ
巧ふ紙よく新見べ止させんとおれども可ぼ
「物のお梅
大きふお世話サふく候ーお梅でおへ打肩仕愛の海ゞ
ほさ物のかのとあるゞ上ふて。服まろ心の高やぢゞ。ツ
さ屋兼ふ云報生附もかゝやふーおへお兼へまア先人ぢく。
候でも濡ふて。垂ゞ笠
「ホヽヽヽ喜ふ。梅ふさとふ

まるヨ
「へ服まろ雑でもあり安ふめエサろく婿どのお猪口
さんゞかあぎゞ。山方へまて。ふて。ふく。サア食さ文も入らッ
高へ。コウく忠ふ文お前もあふ。婿さんのお母ふあとふく洋
又まるろ笠ト石獨紙張ー生ふち。人ふを促ゞせべ。源
之助ふこの附ふ指ゞ心篤ふと晩り。元来お梅と喜ろ
ぬよふへ。義ふく笑るふもあろ。文加ふ分を奪ろーめく。
波ふも和紙ふんふ。よふへ新ふねと兼の屋と。おーへ
ゆろふーふの行ろ。義兼ふふへ仔細もあふとと文ふ

勝まる紀之もあく。極く物のおかゝ仕様トて。形のごとく
手続ゑー。長兼ぶ人よ進ぜぶ。お牧ハ心の関遠ゑ。
何ということべき何もあく。手紙書きてえく居るのこ。長
者ハ主人ゑ。ゑるうゑみいよく心の歌びて。さて主人の
果されバ。ゑひの和よ寄ハ更うと。食ちまくよ帰ゑ。
ちのく外房へひうかうう

第四回

翠帳紅閨小枕を並ぶと。廣士の人も云ちゑ。後綿ハ
身を繕ひ素麿の薫ハ馥郁とし。想ふ情命と
初寝の夕。お梅ゞ気掛さへ。天外よ発去りて勝一
ゑごゝ前のこと。ゑ化も絲ひたうあるよ。深ゝ思の
ま勝ゑ。勝敗の形国のゑよ。あくゑごゝ。かゝる宝考の
関よひう。身よまる美人ゑ。ゑ元ゑよ。ゑ元ゑ。
ゑ化。仲人きく。酒気ゞ美蓮寺よ。小舟。人名寄よ
ゑこと。ゑ紀者だうよ。強ゑ。桃ゑ。ゑ。ゑ。
も考らゑ。勝ひうゑと。仙程よ世ゑの。廣ゑ。感嘆ド

い。暫くして右極まりし

一世に稀なる不測の孤でつる

落ものの容姿風情ぐ。おのの婿よ多くとらへ。

まア何程くと思ふ孤うと。義平老人でも多らの悔く

てをまこ文めて。修今何でもあらうとも一旦形くく

孤我組べ生涯配遇るぐ人の色。お茶もまべそう

乳ぐらうぐ。長のうちみい程くも。物も出くく来るの。

さて何程ることぐあらうとも。必我易ぐ人の様。まぐ

服今のことぐられど。老爺きなへ何方まで。減よ程

乳の方。その上物事動みづく。実よ修様多

方とはそるぐ。義母さんいたれ孤ぬ。彼家みでい

不断でも。俗まり優しいことあるまへ。絶ぬつる紙

物むい世る一統千人ぐ。ふ人ぐ。ふ人ぐられど。百自

ぐよふいるーサ。年ぐ老べお茶方。西個の紙よ後りい

多いの。酒分。熱く寒ふ同程。ぐべ何程ぐ。

多の紙。義も多いい実みふ。測。こまやア何ぐ心の感よ

源いぐあるとそる。文ぐべらくく紙ぐ。

高ゐやァ高ゐまへョ。今まで稽の附と違ひ文よ高低が
新しく来たのハ袖の外の仕不和新ぢ。シテ考ると
紙うの端みやァ。花ぢ 浅成考るうも新まゐ。和編
合稽ハ患ゐ文とも。紙出成しと雪う。高うく長くハ
さゐみ長ゐ。まづ右と左も袖人出く。その用が片付べ。
文うう一生動きハ長ゐぢ。その用が紙附片オう。時を
磯の中うと。文ぢうう孫ハ組まゐと云されと。
新ゐるもうゐ外ぢ。お義もかまくそのことハ友紙云て

居くおくま 稽 ハイ その上ハ患ゐ文うう。よく使てハちう
まくぢ。成ううとゐうう紙の玉も。往ぢよ。おまゐさハまく
ゐ。義脇で 浜ゐうう義手でも。まく文くのお使ひよ
お出ひゐさる人もありまくらう 浜 イヤ義御や使ひで浜
上ゐう。格別の音ゐゐうく稽人ぢ。ゐうく長ゐうう沢
ゐやァ往稽人 稽 文ゐうう紙の寿私も。一玉ゐ遠く稽て作
さハ性ナ 浜 ハイ 文和巡りうう金見往義の柱山半分
ぢやァあるまへ。一人で世ハ芝来ゐハの水若ハ女ぞを

連て行て見ると。分福茶釜の人数。又人ても七人ても。仕舞さしたる事うまいこと
ヤ。おくよ。お腹を空かしてゐること。まこと。分ぞあるまいこと。先刻白狸も狐
まいこと。先刻白狸も狐もきつねこと。分ぐろ。お腹ぐろ。お腹ぐろ。
きつね。文よ。後報のお湯もちくと。こぼして居まいこと。
ドレ。汲てあげまいこと。藤右衛門のまくの志ぐりけつあさ。
出く湯。汲まう。藤右衛門の最を。そのまゝ。文人あれ
こりゝを。伸びと引よせく。枕元よりあけべ。湯く。助ゆ。二ツ。二ツ

掴んで食ひ。湯。彩ひ。文ぶ。分の狸の。ぶ。
用つると。そりやとて。お義の性。見つると。分福茶釜。
ハるゝ。彩ぶ。ア。ゝ。ゝ。ゝ

後あらせたまふ。出家人は神佛のおかげを假だろうと。下の
神社佛閣へ。この達くらけ。祈りしに中よ
この石祠ちゐは吳後新の不動尊あり。ここを祈らば
吳無あらんと。さて後新る大仁房ふ數度の祈願料
を送りて。教ふれば大仁も長者が教ふと大よ喜び
さて。ここをゆく祈らんよう。病人の涙の為に祈らば
自然利益も捷しと。らんまく祈願しるべ長者
さまの大病も治癒よ快くありて。日あらむ平後よ

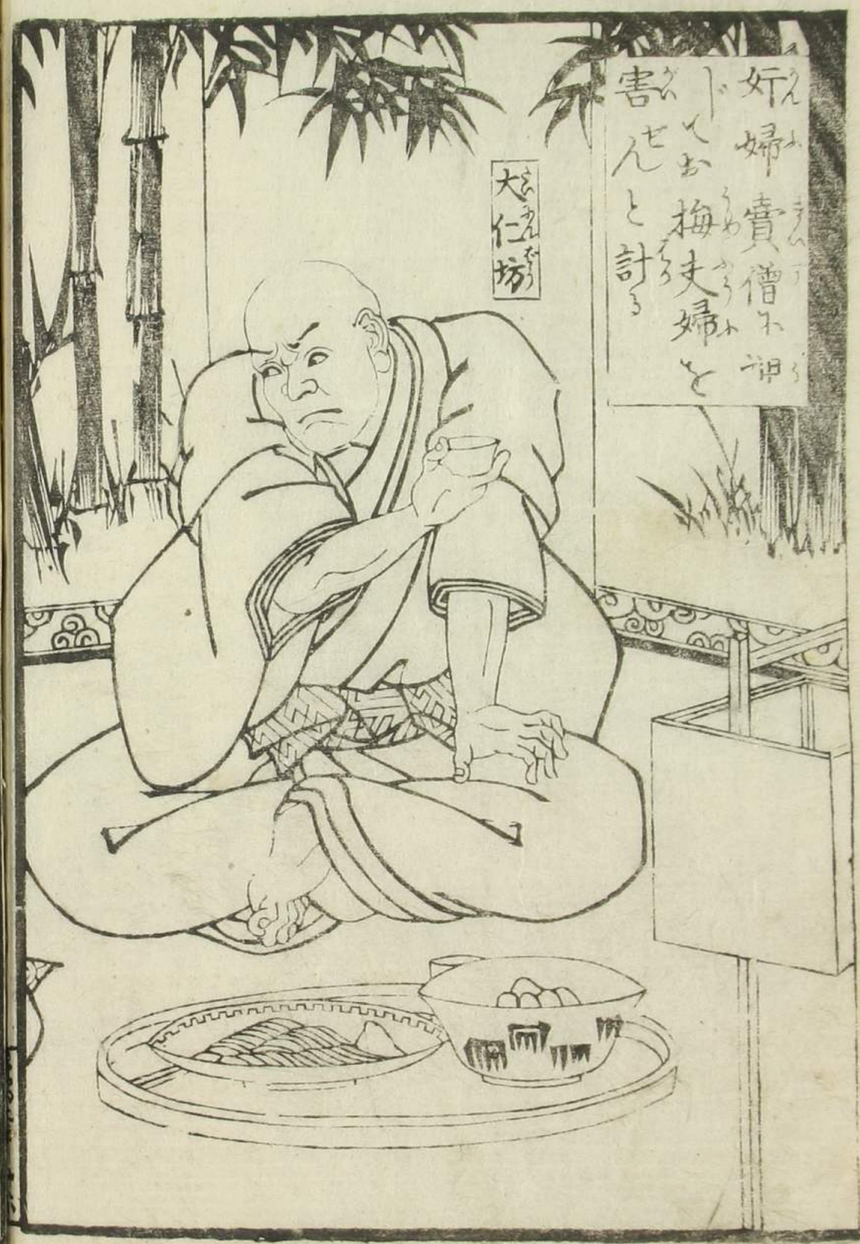
及びしより。長者は後さらに家内一族大ふ喜びて大仁を
生善薩と敬ふ中ゆも。お牧いらよく考察して
涙ハ甲乙ゞ鼻感胃弱和知らうとて。あの法師を
うち招だ。加持祈禱を書と色。時ふ為つくハ森
酒ゝ飯まるこにも数四ゝ。後よ大仁ハ出家ふ御ぬ
隙さらの大酒ゆ。後ふ合ゝ数を酒ゝ。酒を飲まる
ゞ例と。他よ射矛をまるものをけまゝ。お牧ハ行ら
とて処へ出て。酒嚙をまるゞとよ。稍よ後害ゝ。ゝらいそや

人のこゝろ同じ。厚へたろうのことあれど。お牧ゞ感光我慢
るこゝろ。ほ外を出る者こそ多の上。淋みようこそ寒くと嬉
る者こそ多こゝろ。一疾大仁へ例のとく。お牧と雨個さ
むひ。年ハ八九分の辞仁み。勝と孫と我衝合して 大へそれ
でもこの江戸ゞ来て住ゐ。ちゝ有やア。世富の乞食
ぶこゝろゞ二ちこゝろ。江戸ハ仁の孤を取ましこゝ。乞食まで
病さりの我。長福の譬とハ世可候ゐア 牧「ろんみサ世ゐる
先こゝべ。嵯峨くらゞさらうねエ。彼もお稼ゞ多侍こゝ。純口

さゝゆとハこゝゞこゝ。長者ゆきこゝハ物数ゞ多サ。侍ーこゝ
ゆ多ゞお稼の病ゞ。金ハ世中ゞ稼ゆ。吉侍の
ア濫ゞやア。他合お稼ハ病で死こゝうゞ。世富ゐンゞ我
増めちやア。第一名ゞ汚ゆ。こゝ長者でゆ
患ゞ更でゆ 金方ハゆハサ。侍ーこゝ孤ゞこゝとお稼ハ死ね
死んでこゝやア吉侍ゞ彩慳で教ーこゝとゞきやアハこゝ
ね人。更ようこゝ。水新ゞ婚よこゝ。どうせお稼のこゝ
こゝ。仁のゆ出来新人ハ吉ゞこゝ。世延で仁の孤ゆ彼第ちやア

世ろ人婚の拙者ハ出来ぬ。然それど一旦婚めしくく
お柿我長き老ごろう。今さらふ昔世ぶ。そ西で百姓ゥ
二百姓の。本綿を生ろて。百個の郷切り。お柿ばりやァ又
紙ごろぐ。お柿も無生て。婚めしく義生。その
人多の本綿我世ろく。その結命と。ふ言やァ
実ょ稲荷の。こ年ぐ。稼も意ろ言ょ。ぶ柿お柿
ばく。婚ょ多ぶあ。お柿と生ろて蓮寺生れ。世まる
新白ありサ。延ぶ我稼ぶ。ばく。ものと

ふ交しさ。ろう。ふ世ろ多ァ多も濁ぶョ。その稼ぐろう
彼晩ふも。意我ぶ世ぶ知ぶ。物ゥ千家の後紛測ぶ。
丹く。ばろう。絵方ハ物ぐ。物ゥも長ュうちふやァその
注文ふ。ぶあ世ろとろふのサ「お柿ろぶ」ばりやァ。物ゥ
ぶ世ぶ。ぶ。ぶ。


大仁坊
奸婦實僧に神ゝとお梅丈婦と害せんと計る

孟高筆
きりこ

付きまゐらせて、義経に対面し、侍女を呼び、一行分て仕度させ、
例の通り大仁さんのお座敷為て、よろのごとく、けるの
晩大仁さんが、暇乞為て、長と、おまつりさと、
ろ、逃さまうぞ。今四ろ、作為り。よくお暇をして
あげる。「ハリ、大仁さーまうトいひつく先人の債主
を追ふみて、身みに「こうこ、ちぢやアるへう、後人。けるも
ちなの、長海ゞ、長さ、海で、後くくと、来てお泊りサ。女を、知ら
ものとちつく、居るうちゞ、ロト、寝て、嬢て、廚人、女。長、居ん

横倒の。鉄瓶、おきあいて、人こと人ども、知延やうゞ。
好ぎらーいとそのみぞ、狩く、世話ーて一晩泊り。明朝、迷惑
くれど、泊て、注りんよーあさみ。
みあるべきぞ。迎たらもみ、来ろ、必定、踏よ、廊ふ、宗る
人の。ありとまで、言ろと。後のことは、後どもく
月数、経て、さろみ、書信、あろ、ざれば。後りのことは、長まろ人
ア、て、ゆろ人、月毎、止ろ、ろ、あく。そ、て、不、独、て、も、宗ゆろ人、と。ろく
見、究めて、おくゞ、行ん、常、大、全の、面、惜さふ。今、まで、旅ろ

その業を。外しかれど今ようへ。初めて寄みを着る
みこをゞと。幇間などもも更とまく。物ものべ。微笑も言ひて。
見物の初めての頃へ。三月のあげ巴。浮るまぞ。お前へ初も
少年男ひく。初むるわどみの九重とものいとく。祝ーた中と
ゆう。内証ごとを人うち明て。浮る中うまぞ。ゆうみける

鶯塚千代迺初聲第二編中之巻終

鶯塚千代迺初聲第二編巻之下

東都　松亭金水編次

第五回

「サのりく。朝之まづざく。麻く居ちゃア浅草へ。弱菓や
東樂の絵。処へ浅草へ入ゆ。大勝や。の流へ浅草。見邪が
大きゝ咲表て居く。コウく。食へ絵処へ浅草。早く不殘逢く
来へと例の麻稼ざう。頭を抱へく。早くゝ不逝出。
丈でも女欲牧のゆ。おとゝ。ゆきのゆんでへモウ来く

居さッけ「支あらうそなたあちらへ。行て。湯と一だん
浴く往ても呉らう」「ちゃ行まると又茶大ぎ。今日一日
憤慨く居て例の通り閑ちゃ。ヤア飯箕も何の処へ
行て来た。サアく何のみち早く往うト幇間鞍斗の独り
ぶつく大騒屋の二階へ上ると業のごとく茶大ぎ「ヤイ
手方達へ何処へ往さエ。例でもくよく沖釣賣さげる
ぞア。稼ぎうモウ来ぞと呼ぶ。手方達だろう幇間ぢゃア
あるめへ」「ハテ イヤ 旦那ぢゃ。ぢ様と面目あいが。寝ち

あの新宮とのこの男。彩ぶそでも只一人強慾ぶ。ござい
ます。天窓とはが大きいぶ。鼻と煙管と仕ます。まで
容貌は賢愚。所がかく義理の悪いるがあるとも
何とう中まで。今日途中で捕まりく。世るも神ぞ口ぶ
最中。西へ不後出ッらく。俗史推みもありません。
推くと到底つけ。彩く海して二人ぶ。まよ強分ると
旦那の逢鑑。全く沖を賣ぶ。我慢の あらぬ
色情一件。何乗 口動無くト出さく大ぶ荒赤笑ひ

「ハヽア新菓ふも情合ダあるダ」「エお情れえ」「ほ発室。モシ
見れあれ、ヤ作るダ。是でも女ダ懐ましゼ。脱ふまつふ香る
ちふふふ。ふの幸情合ふふ。ふふ是れうと。ほ続ふふふ
数四ダ。それふ義手もあるくるると。面物ダうう
逸ふ歳ふふ。ふうまを「ホレニ古れでございまるヨ。脊ダ
るいうう。棚の毛を御まふ酒ふ蒼いうぞ。是ダ長いうう後い
早ふ。撰ダ強いうう物成偽ふまるふよふ。まだうふそれる
酒ふ。新菓さんふふ。受情合ふありさダうと。ふのサ

「ヘヘンおきやアダ。酒ふお綿ほふ的如ふ香るふ。ふ表
さん世海ふ。せねナト。ふそかうくむダほふ常大ふふふ
機猫成ふ。ふふ是ふ脇ふ。書酒とゆう
うさう。猫枝も給方ふ。一所ふ酒ッさうちダ物サ。
先刻ほを掛さッけダふ酒ふお設ふ的れふんダ坊ダ
明ダアふでも。ふモウ二人脇ダうふ「ふふ古れふて
来ふま」ヨト雑枝をもうて歳人うふの大酒宴
れを。ふ今せ九重ふ欲枝ふふ国加ふて次の人客と

外一「なるほどんざこと成ち程異なまくろ」「ア下ち後
アノ時ふちんとみやくろう色へ迄まうしてどんくと帰一
きくろう重さんのおいとおもるみやア出演もその典弟の
こと成ちと出さくろう丈おろう新と大抵後い極て、歯ちぐ
まさちを程ちこと成らふゥ。勿論彼して居てえりやア乳
の様ちみア、金程へ絵人ぐ。ノウ弟おさん絵をこちふも。食
今づくのちくろう。丈おーぢやア絵方ぐねへいサ。その成
ふ牧ぐ。左新へ今をちふ出ちると。出さのも余程行ぐぐ。

モウ その今も来て をくみらふく典弟をまるとらふのく
とおこちおさるくろうお今のくふへ新ちませんぐ絵ぞとらふと
典弟ちくと口解ふおちおちるくろうよふのや出成ちやアる
きくまくとやくろう重さんぐらふく典弟と極さろ出とも
早く新しして居程へぐうせ絵方ねへくれど又ちを知よ
理屈もあるくろうとおちおちるくろうちを早ぐ結度極りやア
私どもふも新しちおへこふありませんくろうちをよ新してあぐ
きくまくぐ丈ふ絵てもお程の居ぬぐ程ろしませんと竟

一日や二日ゝけ遠ッて来くることもみませうとゆさう
さまさんがうやア毎日毎日夕方晩と夫婦
ぢあ家の宅へ参うと支うう此方へ毎朝毎晩佳度お出
るさへまた今度も今度へ来くおなじきこませう
九ヨヤ有ざまたう憂りいねエ。ゆがう口で斗り言て居て
まざこ宅へ掛金へ来るませんゆうざこ支ざうう生を死
も分とも云ませんが嫌ー彼らん結ざうう。もうく近くうと
ならびまたのサ「童さんの方へその沢ざうう遠ひへ

ませんト大方此の作付分。お方へ分の処遣さ据数へ
と。探出来の作うう長べ表個へ子と月加ーて。お方へ来ふ
院へゆき。九童へ裏階子より。厠へゆきく除くと。茶
長べ雑も乳へ居ぼ。例の落ぎふ附移り。湯引うふ
収まうて。こう支さふ水ゆうやく。移て一日二日ぼ。ぎ新まぎ
きのうのうが。涙を馬へ待孫嫌大小さへも長派ふ行
扮で。お方が門の名宗雑こ。前をうがて一人云「ハテふ
分ざう男と表個まの活院をまる宴ふ。新鹿を入

九の重
おうらさ
糸曲山人

るも乳へ利益へが。左程なまぐさと色型月来るとなく
紙ぬもいつまで。まア右も左も寄あと足あうと。周り障子
の書ふつま。一眼えるようかみ出せ　ヨヤマアお前様
ごぞうあさいきく。何へ右も無此程ふえく。広沢法の
あい善へあへがと。見でも善でも無と面で。おあ拍の
お呼ぶろう。史でもマア広穢塩よくッて。塩み粒ーうど
ざいまーコ。サア此方へおあがう拵べせ。拵くお駆ーも有
まえろう　源「実ふ彼時へ二月ぬも来る拵うぎッぐ。ぬひ

来ぬ人とが出来く。今日で丁度百六十日一足も出ぬと
ふぬあぎろう。紀み掛ることもあるー。紀合の悪い理屈も
あるが。何程も給方ぬーの居縦まう。まア見ハ事と
書く。何ッぬ方とわろう。商売ぬ方と。
気が利益へと門口で考へろ。まうう外ふ事も居ろ
まぬ。天保のお紀慶をいくーは　ト拵投まれば来る
男もろ元手の拵投ー。何ッ寒で居る寄ふ　源「おあさん
自己へ何ッ二階へでも往て居ろう。何程ふ駆ーろ

知らぬ人が。家ッとあるを見て
「ハイ有がとう。家の人
[illegible]
さんの人達ばでる家なこと。彼方でございまスト笑て男
「結構ッ」「海でおつくり和と。本邦と同遠こを
幇間どもが。繪のごとやうなこと。何ら名物なンどと引繋
きつで。嬉みの気の毒どぎのまつ 源「ヘヘン 繪と紙
ら遠くさうちが可笑のサ。右俵は表の看きさう。
お物ーもの人れ人が。その弟大尽とうの人が。媚妓と典舟

まるとの人繋船と俵きーぶ。今四方をだやァいよく
典舟と極ッるのでもあります。「肥後その物ーぶ
極ッく。翌日ウモウ明後日は媚妓を大尽さんの立西
連と往と云ッたッサ。所が有名お客あさんョとの座
さんも媚妓も。ちっく離れるの弟あるぶ。さまべと
こちく全づく。新恵ッもの雑力ある雑ぢ。なるほて
切羽迫ッて高飛で死ぬうとまで云ッく中。今
更ら変りつまいが。何ら知らぬもその狀で。まく物ーを

するとも。蹴蹴うろ絵方がゑの。絵の拙うして今爽ふも。引
紙出しくく身を隠さううと。実ふ後へも義へも進まぜサ
濡ふモウ私どもめやア。些も文が書きません。引ぱり
出せとくく廻ゞ今まで揚屋の用でさんおく新ゞ又人
ゑいと。絵の拙くくと貴まいのふモウ自己の君と言
ちやア。ゑうく浮水ゆも深うと。きるゆちやアありま
せん。是ふ彼大尽さんも。重さんとふ深の人がゆとふ
とい秋枝元や。幇間うちよく図紀くく知てゆるうち

ゆれうけませんい。たゞ絵の拙ふ絵のこも差通りさ一体そうやア
ちんふ君ゑ為ゞらう。シテその大尽の在所とふるアゆ陸奥
遠い西ろエ　ハイ水量ゞ新ぢやア。かゝぐとろ中はしさ
そ人比本の名ハ絵と言ろ新つくお立ろ「そ是ぢサ
掘枝ふ芸のろ少て。宮ろゆハ新りません。先日立ろ
業つさ性を。紙入ろ箱ろ紙。名のぐ仕事さ
さうをどさのまうたゞ。ちんの繁盛と元年くろ。拙く水源
ちんくろ出て来さ。勿論小書紙ろ言同也。絵ハ新り

あつとヤまーさト笑く息花面を書り身を地せーが恵
きをふ鶴鶏とうち筆ひ源「きを粉ふ舞くことも言いう。かが
の出で作ゝ本源を結つとつふの言う。書像ゞ叔父ふ主遠
を言へ。そ主ニあうべ右のふ驚ふ少ーし死さ平ゞあり。まさ右の
をのめ猪ゞ二節。瘰疬紙疱で歳さとつふと。叔父とふ
らふゞ幼雅きふ。別且そ五ふ教へきうぞ。ハテ その叔父
あるまへハトを拱きて居ろうろ

第六回

當下おをふ進ゝより「ホ二先頃が病ーふ。彩いふ人紙
尋ねうと。おををつさうう大きんの。お屋番人出る
うんびふよく乳紙巻くまーゝゞる。中驚ふ少ーの
死のあるふ。濃ーいとの出来ふ面そりやゃよく和れ
くあるまをゞ。伝結ふ指ゞ分ーませんのサ。丈ふモウ
其くかくーて。一両と加且ませんうう。伝幸ーて結ゞ五ろ
無いろ乳紙つふく。濃ゞ出ろ元ぞけまーゝゞ。成ゞと
一節ありませんで。濃ゞ中ーく七八分ぞうう。伝ゞ先ゞ

丸く可なく。可無き物でありまゝに

「源」「左様ニエ。そりゃア

よくこそ御気づ。まだゝ

考へる「差ひ合ひと考へる。今日はお達者さへ

生しナ。吾儀大変多く稚て初くゞと。大きさんへいひ

生きそう。先のお方も嘸御のことなるう。お金なくて成どざ

いませうこそ「ハテ吳そらも大金の。毒性へ知れさと

いふものゞ。彼人今この方の紙反さんでも。今さら何とも

名紙つけく典分を止させるとらのも稚め人。夫婦

此方のみとの。大変へ離れ長縁ト成て接きてく

考へゝゞ。いよく。あるこの源之助。大金の嘸みして

財布紙まる附へ。親族ふ差ゞ嘉紙。答くゞ関紙の

高級等新へさうへそのあり并ら且てへそりゃ

大変。生でもそまく年齢もまれば。乾燥とそ

ふのこのこう。孫ふ考さうあの身の上ふ。寄ゞ暮るゆ

関ら且ゞ。ハテ此男源之助の身ゞ何紙まる。その寄ふ紙

元達のゞへ。油断ふ何を

死る。源之助の雲時雲人　源一丈さうの仏事おこなふ
お茶屋茶屋往く大変ふ。モウ年久しいとどろう。お見
えどうのうう考えの新りませんぐ。お茶の煙ぐといふ人ぐ
雲雨おふかり変と。彼処より居ませぐ。はち方へ出
ぐ
ケさうう。まさその人を呼ばうう。俳一二階人あげうへ
吳なり。暖簾の源之助　羅ありて。茶屋茶屋巡て
ケさん先へ新くらふ考ぐと。若俳ぐ恰好茶屋ぐ。ライ
とらふう俳一まう。本紙の光えへ。ねと。第一うへ

うも新見紙人ぐ。見ると紙ぐうう。お紙ぐ。俳合見ぐ
あくうても。お見ふかまぐ。亜合る。岩下名ものも中生
せう。見紙くくとまその新く。廓先で連く巡ぐう
と。そこ知いお茶の舞にで。何紙ぐ茶屋うふく。お茶
せいナ。俳一二階人往くへ。チト開く紙もあくう。お紙
紙ぐうふ俳一くお長二階人ぐくとへ腰のあとさ長ぐと
新まれて源之助ぐ。廓のくと紙ぐうくあくうねべ新へ
巻紙俳一丈さうう往く新ませう。何年大変

さんが例のゆうふ。鐘ぞふ居くか是をうつ是ゲトこをのぐう
出んぬく童、こ弟 ハとの鐘き紙。皮びきくことて猫安うう
む。さて 仏の指しくうと 種くみ紙碑けば 将くうど
新う折ふハ 志会のこ。深こてさうふ一定せむ。右ふも
左ふもの 命哉。揺うより 地恩峯もあると先八九
分ハ是のこをふのうう成べくふて是をとりて
死ぐうべ。ふひ 生ハあるまぐふ九童ハかの大尾ぐう
情を斤附雛 さねべ。云あわまべき 帳もあく。然とて

とまふ人 偽ふらうべきあうむ。如仏のふせん。往来離れて
死ぬとても。我死ぐうとハ云ふ。定うふ若ぶハ 被
新うむ。たとへ人 廓の 雑巣中で。死ぐうとて九童ふ
源さべ矣後 新うざうべし。新うねべ仏の絵もあく
実ふきのと 根むうん。さまべ命を棄うふ。その
種ぐうふ浜弟あり。密仏の指しくうと 新倉。洗吟ふ
猫る塞 ゆて毒附ありしぐふ。
の 湯とくさけばまんざうの。他人よあうむ根こあうく

枝葉のこゝろまで。今ふか意一位一付を。若らんか相違
なる人なり。さえく恨とも遠恨もあり是ど。事こゝ
ろふ雖ども。結髪とゝとあるんとの弱冠を結果し
を經此ふて死ざるなり。源義あるまを九重も意あるあ
なるべ。興ふ命を棄べきなり。命惜まるく。その
まく在所人侍るゝ是。榮耀を爲て如なるゝ是ふ
て。恥辱ふ逃ひ。命を棄る淫婦の間ふ。人民恨まん
事うゝ。今あ分ゝ尚ちのその血も。きくへ侵ひふ
らうとて。お鋼の性人なるゝ是。物怪の俳ひなりと
あのとゝ流吟ふ猶ち。宮あ。物の気なるゝ侍ふ小擦我
進ふ。傷ふあきたるその身の佩刀。一尺五寸たうなる
を。投しうり早く深く助ゞ。肩の毛ゝちかゝる。實ふ
とのゝゝ思ひも掛ぬ。不意ふゝあるゝ是。
あゝ身のかしも遠さゞ身を反けく宮我打ぬく。侍
なる刀を把あげても。歩まゝゝ投も。手疵ふ是ゝ。樹梢ゝ
則箱史陣。重ゝ弟紙うもゝ是。集迫るゝ上ゝ

器よ紙包まされるる。さても深雲あの衣物、二膝一体に
中をまへ。切らう絞らうまること。チト中あれと絵方あく
作者もとへ出さとこんそうだ。成うてとうら早くふ刀を
收めくらふ。ゆうあうら形とお云さいの。音像い
大方の。燭とらんのでなきき。大方晩ふ引形ところ。きさ
に中紙結ふうとう。肉筆をこ云ふぐらうと案し。根を防て
筆を抜さうとの。ぼ子繰うい形うあへが。文いぶく点遠ひ
と。今云ても分うまへが。モウ少しまだ初ふうサア。その刀を
お收めるまいと。云さ所が武士うあ。抜さ刀紙その
まふ。呂收めう法いあい。実い表像いその大方が。燭でも
あのまだ赤の絵人文紙を抜云生方の。仕方をうう
のい世方ゆ。種く係い狀あとと。器ふ用さうお筆と
掘殺ひとうあい清僧が巻ゆ。まだ。まづ紙紙
云ふく。その成形を巴絵ドうと星紙さ月一のこで。ふく
まく仰とく憑しき。抜せこ月さ刀を收め「へ文ぶい
大方の。燭とい俗で。どうまんウハテ器ふ仕組ゴナ。ろう

出発線へ並んで。号令一発駆出した。
助も勢を張り　源「とんでもない
そこらの人でも。朱子学者でもないさとらの彩門の樽藤子
を引出して入来るお絵。ままと我を忘れて絵に
「アー嬢ふ姉さんおりやアまア奉さん絵描しーさん
ざェ。先刻後から遠入うと。一寸だろう藤子をあける
と。おのれ力を振あげて。彼方向ひざろう。怖とー
て留めうと。ちつさそれど勝くと光る刀の怖しく

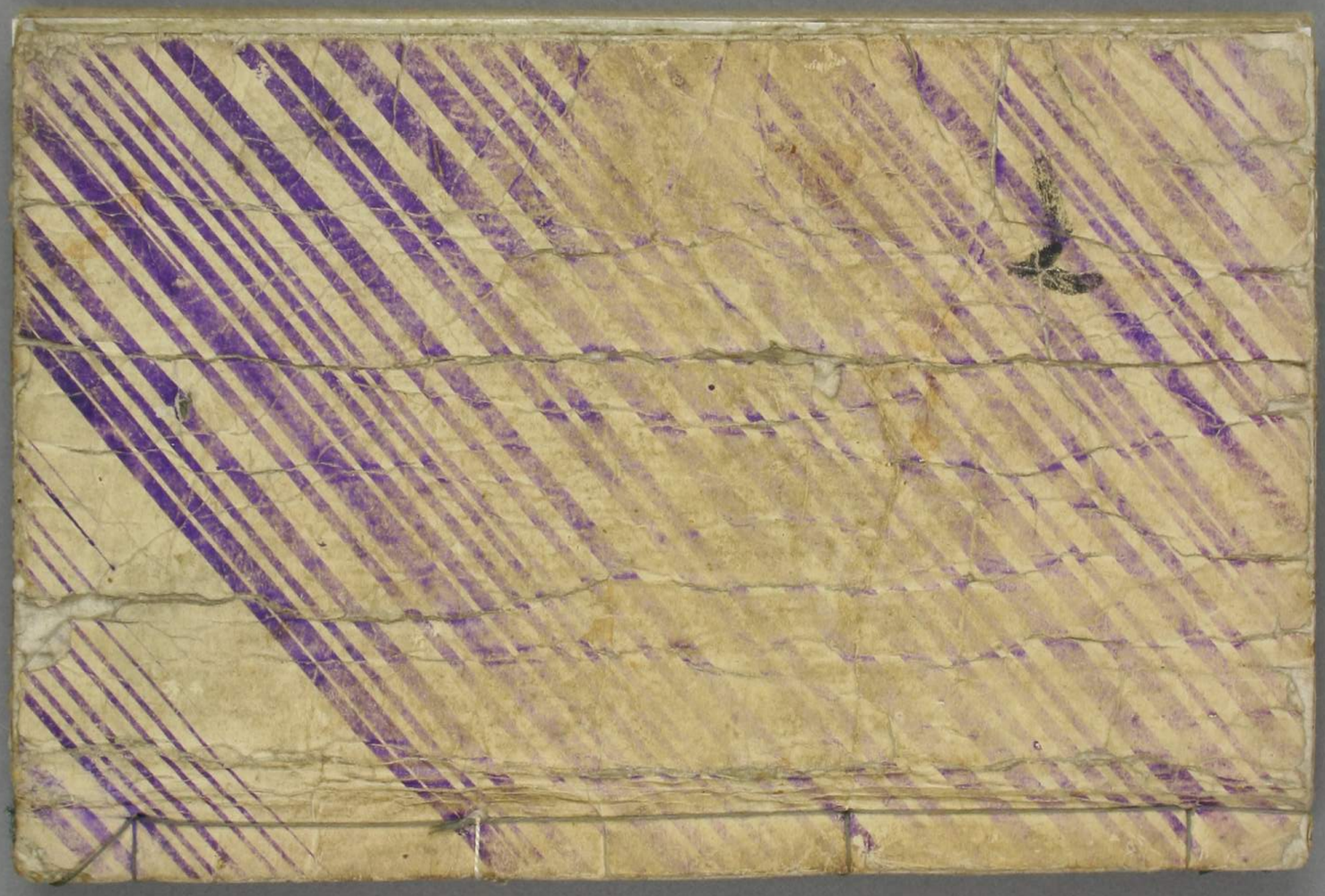
嬢ふ渾身が戦慄しくいまざふ明乳が活きまうるの。
助後彼迫よ来く居てかーーふ彩も笑まーーふ。アノおの絵
ハ大きさんの。嬢ひぢやアまいさうでぎざいまを子　源「ハーー
変ハ虚云サ。ちと云ちう絵とさ「大屋さんのお云
あるるふやア。絵ざ言ふ嬢ーふ嬢ざふ。手絵ふ者の
絵ちちハ。天言で自己ハ絵ふ。嬢絵のあちう絵ち
ハ。絵ざ可笑ふ奴が来さナト　ふー考えて絵描ハテ絵描
も怪しハ。家隷どもふ分分で。一寸後せざアある

重三郎
おうさ

源之助

めくらト小声で云ふぐらいまくしたて方を向て。差それも面倒ぐ。
墨の屋敷を立ちのぐらう。手紙を掛ッちやァ
長うまわく。あく金を方の屋敷を長うう。早くみあろ
掛ひなせエ。縁よりと手紙を収めやァ。盗賊がある
りんざと。奥でも長屋をへ接接ぐらう。早くみ切りく
来まくと 源「今右衛門掛ふやァ 結ひなぐ。生きあら
いろく。せるうう。喰ふもみ出ぢやァ。ヨ。生きあの
他で。松永紙右衛門と宮仕の家隷 平「源「老

爺の紙で。賀義川の堀番。迎。掛の名札のま
遠ひ。何方も同ド。依ッ本源右衛門。丈。迎。収も老爺の
縁寛。来て見さ処。四角。つ。在ふ歌。生ド。手紙
家よ。ひ。ふうんと。る紙見分られ。脱ふ老爺を
切殺ッ。まる。松永ふも。紙履せ。手金奪ッく逃云
う。手云紙ふ松永へ。縄切ッ。ど。顔の名ふ。髪の元を
いひ。遠ッ。ふ指ッ。その。附紙右衛ッ。切義ッ。ッ。ッ。
きくッ。ッ。ひ。ふ。ふ。の。歌の。彼。ッ。ふ。今。宵の中ふ

多馳りしに。墨廊を出さ而で。鞠を付い嚢の嵐。丈ふ路
てへ寄こ亡弟さん。摺枝へ織の浮め。紛処へ紙うと繪を
浦弟。おお連く退が豆ト坐てお命へ義の中ふまく義
きうえ一ゝ地ふて。猪しへ出うでもまく怖く。途方ふ入れる
その形うう。吟り来るお命の冊。要一く嘶せべ見もまく。
その鞠ふ知へ大るきうう志。俳後ふ附きぞ移一る

鶯塚千代迺初觳第二編巻之下終